

「津軽鉄道で結ぶまちづくり」

担当教員名 西城戸誠・辻英史

コース概要

日程 2017年2月16日～19日
場所 青森県五所川原市、中泊町
参加人数 14名

コースのねらい

赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動や、コミュニティカフェの実践を学び、着地型観光、地域活性化のあり方を学びます。

内容

コースの狙い：本フィールドスタディは、赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動を見学しながら、奥津軽地方の「着地型観光」について考えていきます。企業組合・でるそーれの皆さんが運営しているコミュニティカフェの実践を始め、津軽鉄道沿線の地域づくり、まちづくりの実践を学ぶとともに、このフィールドスタディの実践によって、地域のまちづくりの実践をつなぎ合わせるという意味も込められています。本フィールドスタディは、訪問先から「学ぶ」という側面と、私たち自身が「地域にかかわる」ということがどういう意味を持つのかという点を再帰的に捉えることを企図しています。

コースの内容：1日目：五所川原駅近くのコミュニティカフェ「でる・そーれ」に集合し、五所川原の街歩きをした後、五所川原市の夏を彩る立佞武多の展示がある、「立佞武多の館」を訪問しました。立佞武多の館館長から「立佞武多と津鉄とわたし」と題した話を伺い、立佞武多と津軽鉄道、五所川原という地域との関係について学びました。続いて、コミュニティカフェを運営する、でるそーれの代表から「場としてのコミュニティカフェを考える」という講演をしていただきました。初日の宿泊はグループに分かれて、農家民泊をしました。地域の方といろいろな話をして、世代を超えた交流を行いました。

2日目：農家民泊先から集合し、昨夜の出来事のふりかえりを行った後、津軽鉄道のストープ列車に乗り、津軽五所川原駅から金木駅まで移動しました。太宰治の生家である斜陽館や、新座敷を訪問し、太宰治を巡った観光の「質」の違いについて学びました。その後、津軽鉄道の社内で、津軽半島観光アテンダント、津軽鉄道サポーターズクラブ、津軽鉄道株式会社の関係者からの津軽鉄道に関わるさまざまな活動のレクチャーを受けました。

3日目：つがる市フィルムコミッションの川嶋大史さんに、地元を舞台とした映画づくりについて話を伺い、自分の「ふるさと」とは何かという点のレクチャーを受け、昼食をとりながら地域のまちづくり団体 NPO 法人かなぎ元気倶楽部の話を伺ったあと、中泊町の「イネ子の畑」でアスパラガスの収穫体験をしながら、佐藤イネ子さんの話を伺いました。午後はこれまでのフィールドスタディの振り返りを行い、グループ別にワークショップを実施しました。夕食は中泊町のグリーンツーリズム団体「かけはし」の方をお願いをし、学生たちも少しだけ夕食づくりを手伝いました。

4日目：「かけはし」の方が作ってくれた朝食を頂いた後、十三湖の資源（シジミ）に関わる話を伺った上で、でる・そーれの皆さんと最後のまとめを行いました。事後学習会では、フィールドスタディ全体の振り返りを行い、今後の人間環境学部での学びとの関連について議論をしました。



金魚ねぶたへの色づけ体験

学習を終えて

私は奥津軽FSを通し、現場に立っている様々な立場の市民の声を聴くことができました。奥津軽では、ストーブ列車で有名な津軽鉄道を中心として、廃線の危機から脱するために発足したサポーターズクラブのみなさんなど、多くの市民の方が町おこしに関わっていました。「津鉄を元気に、地域を元気に」。そこでは津軽鉄道が元気になれば、地域も元気になるという思いで活動に取り組んでいました。しかし、活動に参加している方々にも一人一人に想いがある余り、紆余曲折や、悩みや葛藤があったのだと知りました。また、現地の方と触れ合う中で、都会には感じられないコミュニティの強さだったり、先行研究では分からない複雑な人間模様や、現場の声を聴くことができました。これらの経験は私自身多くの刺激を受けました。また、3泊4日という短いフィールド体験の中で、私たちがよそ者として果たせる役割を改めて考えさせられ、大変貴重な経験となりました。(2年・大平佳奈)



中泊町・グリーンツーリズム「かけはし」の方と一緒に



新座敷での太宰治の説明



冬のアスパラ収穫体験



冬の潤庶0湖の前で



津軽鉄道社内でのワークショップ



課題の発普潤翼Rコミュニティカフェ・でるそーれ